

2019年
11月1日
No. 117
隔月1回発行

特定非営利活動法人
レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

ひきこもり



イラスト 高津



会報は札幌市さぽーとほっと基金助成事業・ひまわりピア・サポート基金により作成されています

Index

- 2ページ 道央地区でひきこもり学習会開催／サテライト・カフェ 苫小牧・江別で開催
- 3ページ 居場所「よりどころ」活動報告／サテライト・カフェ in 小樽開催
- 4ページ 第14回KHJ全国大会 in 北海道 開催
ひきこもり者が生きる力を育む地域共生社会にむけて(前編)
- 5ページ ひきこもり支援セミナー ひきこもり経験にこそ価値がある
- 6ページ 支援機関の紹介～NPO 法人 ジェルメ・まるしえ ほか
- 7ページ 北海道新聞「読者の声」交通機関料金値上げが当事者に打撃
当NPO創設20周年～役員が語る③理事 吉川修司
- 8ページ こちら事務局／編集後記

道央地区でひきこもり学習会開催
支援者家族が集まる

9月に開催されたひきこもりに関する学習会や研修会はサテライト事業を含め9回行われ、田中理事長をはじめ理事やピア・スタッフ総出で各地へ赴きひきこもりの理解啓発に務めた。

9月11日(水)に開催された「札幌市東区民生委員児童委員協議会研修会」9月26日(木)に開催された「石狩市こども・若者支援地域協議会代表者会議」には田中理事長、吉川理事の2名が登壇し、8050問題と自身の生活について語り、田中理事長は中学浪人から現在のNPO活動につながるまでの足跡とひきこもりに希望を見出す支援のあり方について述べた。

一方「石狩市こども・若者支援地域協議会代表者会議」では、家族会のあり方について吉川理事が触れ「家族会には杖をつけて参加する方もある。老骨にムチ打って参加するのはあまりにも忍びない。本人自らも対策を考えるべき」と述べたのに対し、田中理事長は「ひきこもりの大きな課題は本人のみならず家族までもがひきこもるところにある。親が家族会に参加することで本人が動きだした場合もある」と家族会の存在意義を強調した。また当NPOと並んで石狩地区でひきこもりの支援に携わるNPO法人シエルメ・まるしえ理事長の新田大志氏からは相談支援、居場所活動、学習支援など多岐に渡る支援の報告を述べた(7ページ参照)。

9月28日(土)は、20回目の節目を迎えた「不登校全道のつどい」分科会において、当事者や若者の声を聴くセッション「ひきこもる今に希望を見出す」のもと30代40代当事者2名が登壇しナラティブな経験の語りに希望を感じ取ることができた。

サテライト・カフェ苫小牧・江別で
開催「ピア・サポートの意味」

10月3日(木)に開催された「サテライト・カフェ in 苫小牧③」では、後援団体の苫小牧市地域生活支援センターせらびの支援相談員とピア・サポーターが話題提供した。センターでは精神障がいがある方に対する24時間体制で対応する電話相談や週1回程度の自宅訪問も実施している。また障がいを持ちながら仕事を続けるピアサポーター6名が障がいを持つ当事者や家族の相談に応じ交流を深めている。今回のカフェでは実際に活躍する2名が活動内容について述べた。

ピア・サポーターの一人は「私たちは、長期入院の退院支援を行うほか精神の病気を経験して傷みがわかり共有できる仲間でもある。仲間同士の支え合い、入院している方と地域をつなぐパイプ役をしている」と述べ、長期入院した人が退院後、地域で生活を始めてからの苦労が多いため、サポートは退院後も続けている。

田中理事長は「ピア・サポートは精神障いのほか癌患者や学生など多岐の領域にわたって存在する。当事者が声を上げることで同じように悩んでいる当事者の心を動かす。いろいろな苦勞をした体験を自らの言葉で語る意義は大きい」と述べ、ピア・サポーターを支える専門職の理解も欠かすことができないと言及した。

9月30日(月)に開催された「ひきこもりサテライト・カフェ in 江別②」には、33名の参加があり、ピア・スタッフの大橋伸和氏の話題提供後、5つのテーマテーブルに分かれ交流を図った。また10月3日(金)夜間に初めて開催された「サテライト・カフェ in 江別③」では、ピア・スタッフの尾沢基(もと)氏が話題提供した。

ひきこもりサテライト・カフェ
開催スケジュール

江別市・第3回

とき：11月21日(木)午後2時～4時
会場：江別市総合社会福祉センター(江別市錦町14-87)
問い合わせ先(現地事務局)：社会福祉法人江別市社会福祉協議会(くらしサポートセンターえべつ) TEL 011-375-8987

苫小牧市・第4回

とき：11月7日(木)午後2時～4時
会場：苫小牧市立中央図書館2階
研修室/講堂(苫小牧市末広町3丁目1-15)
問い合わせ先(現地事務局)：北海道苫小牧保健所 TEL 0144-34-4168

居場所「よりどころ」活動報告
家族にされて嫌だったこと

9月23日(月)札幌市の委託事業「ひきこもりに関する集団型支援拠点設置運営業務」居場所「よりどころ」親の会には23名が参加。ピア・スタッフの大橋伸和氏と当NPOの武田俊基理事が「家族にされて嫌だったこと」として話題提供した。

大橋氏は「学校や社会生活の場面で失敗経験ばかりが多く、自信のなさが足枷になる。そんなときに家族から『がんばれ、何とかしろ』と言われると不安になる。そのような自分の気持ちを親に伝えることも余裕がないためにできない」と述べ、親が叱咤激励する正論に答えることができないモヤモヤ感が次第に暴言へとつながった過去を振り返った。

続けて発表した武田理事は、ひきこもりの人がもつ将来不安や焦りが、親や家族からの就労圧力により強化させ、かえって身動きがとれないと指摘し、当事者の言動を否定的に捉える対応の問題点を挙げた。

田中理事長は、当事者自身がわれわれでも理解している将来不安について「就労」という言葉を切り札にして迫る対応は当事者をさらに追い詰めるため「ひきこもりのではない話題」から会話を始める「コミュニケーション」のあり方を参加者に求めた。

居場所「よりどころ」の開催日程は8ページを参照。

稚内市でひきこもり研修会

稚内市生活福祉部地域共生社会対策監兼社会福祉課が2020年度から開始する「ひきこもりに関する実態調査」にさきがけて開催する研修会で当NPOの田中敦理事長が講演を行います。今後当NPOとも連携をとりながら稚内市のひきこもり支援体制の強化を図ります。

研修会は2020年2月1日(土)午後1時30分から午後4時00分までの予定。詳細が決まり次第、会報や団体ホームページでお知らせします。

サテライト・カフェin小樽
対等な立場で自分の気持ちを聞く

10月16日(水)に開催された「ひきこもりサテライト・カフェin小樽⑦」は吉川理事が司会役と話題提供を担当。ひきこもり経験者、親、支援者13名が参加し交流を深めた。吉川理事は「会場へ来る途中で神社に参拝してカフェが上手く進行できるように祈願したが、賽銭が少ないので効果はないだろう」と述べ参加者の笑いを誘った。

今回のカフェでは様々な立場の人から意見を聞くことができた。十代の不登校からひき

こもり経験をしてきた30代の男性は、悩んでいたときに病院や保健所の専門職に対応してもらったが孤立した状況からは抜け出せず、インターネットで知り合った同じ境遇の人たちと対等な立場で交流できたことで気持ちが楽になり自分の気持ちを聞いて「コミュニケーションをとることができた」と述べた。続けて男性は「外出できず電話相談に頼っていたとき、電話は匿名でやり取りするため悩みに関する話は聞いてもらい孤立感はなくなるが、自由に趣味の話などの話題で関係をもつことができないため、より人を求めたくなるシリンマにかられる」と当時を振り返った。

小樽市内で活動する民生委員児童委員は、露見しにくいひきこもりの存在把握の難しさを訴え「もっと私たちの力を活用してほしいが民生委員の存在を知らない人も多い」と述べた。一部の町内会は機能していない現状もあるため失われた住人同士の関係性の復活に向けて委員の活躍に期待する声が多かった。キリスト教主義に則り農業を中心とした支援活動を展開する支援者は、課題を抱える他人同士が助け合う共同生活のなかで生活力や人間関係修復に務めている活動内容を紹介し、「自分のための人生を一生懸命生きようとしてドroppアウトすると再起が難しいので、誰かのために役立つ人生に価値観を転回すれば社会に所属できる場所はたくさんある」と述べた。

今後の「ひきこもりサテライト・カフェin小樽」の開催日程は8ページを参照。

第14回KHJ全国大会 in 北海道 開催 ひきこもり者が生きる力を育む地域共生社会にむけて(前編)

NPO 法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会（以下 KHJ）主催「KHJ 全国大会 in 北海道～KHJ 全国ひきこもり家族会連合会・実践交流研修会」が2019年10月12日（土）13日（日）の2日間にわたり北海道立道民活動センター「かでの2.7」4階大会議室で開催された。来賓には13名の国会議員、札幌市議会議員、北海道議会議員が列席した。冒頭の挨拶で KHJ 共同代表の伊藤正俊氏は社会変革を求めるにふさわしい北海道で全国大会が開催されることへの賛辞を述べた。引き続き北海道知事、札幌市長の来賓挨拶（代理）で開始され、初日にはこころとそだちのクリニックむすびめ院長である田中康雄氏の基調講演、宮崎大学教育学部 境泉洋氏の基調報告、厚生労働省 社会・援護局地域福祉課課長補佐 安西慶高氏の行政説明。

2日目は「災害と危機予防」「家族関係の立て直し」など5つの分科会に分かれ見識を深めた。台風19号の影響で交通機関に支障が生じたにも関わらず大会には2日間で延べ400名に及ぶ参加者が詰めかけた。本稿では田中康雄氏の基調講演の一部を採録する。

基調講演「ひきこもりにある方々の生き延びる力を応援できる地域の共生社会の設立に向けて」

私が長く不登校臨床で学んだことは紆余曲折あるけれども、いろいろな人たちとの出会いがある中で彼らは立派に人生を歩んでいる。それに対してひきこもり臨床は非常に少ない経験しかない。まずひきこもりの人たちと出会いが難しい。本人が受診するのはほんの僅かなので家族を支援していくしかない。一度も会ったことがない本人の辛さをわからない私が親御さんの要望だけを聴いて支援するのは難しい。不登校は待ってくれる時間があるがひきこもりには少ない。子どもたちと向き合うときの唯一の武器は時間だ。子どもたちはその時間のなかで育っていく。時間を味方にできないひきこもりの人たちに対しては経済的保証をいかにしていくかが課題となる。働くことよりも生きることを考えよう、そして自分の力で生きるのではなく様々な力を借りようと言っている。本人にとっては屈辱かもしれないが、私は一人で抱えなくてよいと言いたい。



田中 康雄 氏

大正大学心理社会学部 臨床心理学科 近藤直司教授の調査によると、ひきこもりの問題の背景には「発達障害」が33%、「統合失調症、気分障害など」が31%、「適応障害、パーソナリティ障害など」が36%あることが判明している。見事に3分の1ずつ分かれている。繊細さや誠実さがあればあるほど社会参加が難しいため、人が精神的に問題を抱えていて生活する上での躓きは「生活障害」と呼ぶべきだ。個人にある発達特性や持ち味をもって生活するなかで、人や環境の流れがその個人を追い詰めてしまえば「生活障害」になる。その方をサポートし豊かな共生社会が実現できれば個人の個性が個性として認められれば「生活障害」にはならない。

共生社会を実現させるためには「斜め後ろの支援」が必要だ。「医者言うことを聞きなさい」といった絶対的な権力に従わせる垂直の支援でもなければ、ピア・サポートのような同じ悩みを持つ人たちの関係で成り立つ水平の支援でもない。ピアな関係性のなかにも不平等な優劣が生じそれが垂直な関係に移行する場合がある。それでは「斜め後ろの支援」とは何か。ボクシングでいえばトレーナーのような存在。戦うのはボクサーでトレーナーは戦っているときは鼓舞するが倒れそうになったらタオルを投げる。投げるときもボクサーに尋ねた上で、これ以上戦い続け状況が悪くなると判断したらトレーナーの独断でタオルを投げる。ボクサーには怨まれるかもしれないが、「あなたのためを思って投げたタオル」は垂直な関係によるものではない。見守るけれどいざとなればタオルを投げるのが「斜め後ろの支援」だ。これは微妙なバランス感覚を維持しないとできない。「失敗したら共同責任、成功したらあなたのおかげ」という関係だ。

1980年以降自分らしく生きることが当たり前になり、人それぞれの生き方を大事にする多様性だけが一人歩きするようになると強い思考で守られてきた集団が壊れ自己責任にさらされる。多様性を大事にする弱い思考を支える大きな枠組みとしての父権性（強い思考）が求められるがその共存が難しい。

かつて尾崎豊が「支配からの卒業」と歌ったが、卒業した後の「共生社会」ができているかどうか私たちに課せられた課題だ。不登校もひきこもりも「支配」からの一時的な撤退だと思う。だから撤退した場所が家族・家庭といった安全地帯であることは大きな意味があると思う。

後編ではシンポジウム、分科会、北海道ひきこもりカフェについて掲載します

ひきこもり支援セミナー ひきこもり経験にこそ価値がある

8月25日(曜日)、北海道ソーシャルワーカー協会主催の「ひきこもり支援セミナー①」が開催され、80名の参加があった。第一部は田中敦理事長の基調講演、第二部のシンポジウムでは、函館の当事者会「樹陽のたより」のメンバーで現在社会福祉士として働く加藤和彦氏、元小樽不登校ひきこもり家族交流会世話人の鈴木裕祐子氏、16年間ひきこもり、現在は新聞配達をしながら当NPOのひきこもりピア・スタッフとして活動する尾沢基(もと)氏が登壇した(写真-1)。

尾沢氏は中学の不登校がきっかけでひきこもり、先が見えないまま20代を迎え、自己否定をするから外へ出られず、出られないことを口実にさらに心を閉ざす悪循環を繰り返した。

28歳のとき孤独死のニュースを見て「自分もいずれこうなる」と思い、次の一歩を踏み出す決心をしてひきこもり地域支援センターへ通い、その相談員から居場所「よりどころ」の紹介を受けた。「よりどころ」では最初は誰とも話せずゲームばかりしていた。徐々に参加者と交流を深めていくなか、ひきこもりは自分だけの問題ではないことを理解し、自分自身を客観視できるようになった。

気持ちに余裕が生じた頃にセンターから新聞配達のアルバイトを勧められ始めた。これまでは自分のひきこもり経験を足枷に感じていたが、この経験にこそ価値を見出したい思いが湧き、ピア・サポート活動に興味を持ちはじめた。その当時の心境を次のように述べた。

「今まででは何をやっても続けることができ

ず負い目に感じていたが、逆に言うと16年ひきこもり続けたというのは結構凄いなのかと思う」さらに続けて「この16年間は履歴書では空白期間になるが十代前半から二十代後半まで続けてきたひきこもりに価値を持たせることで自分の人生を肯定できるように気がした」。

「ひきこもり経験をネガティブに捉えず、その経験を活かしてピア・サポート活動をするプロセスのなかに当事者ならではの視点がある」と田中理事長は総評を加えた。

10月5日(土曜日)に開催された「ひきこもり支援セミナー②」では第一部が札幌市ひきこもり地域支援センター事業部長の三上雅幸氏による基調講演、第二部では50代の当事者の大田原守穂氏、とり氏を交え「ひきこもり8050-生命の危機予防福祉を考える」と題してシンポジウムが行われた。

大田原氏は、結婚して30年目。20代から季節性のうつ病に悩みながら病院のデイケアやひきこもり、発達障がいなどの自助会に所属しながら生活を続けている。生活をともにした妻に迷惑をかけ続けた負い目もあり「妻が右半身マヒの重傷を負ったときは私の責任だと思った」と心情を漏らした。

現在70代後半の母親と実家で暮らすとり氏からは昨年の夏から「居場所よりどころ」に参加。悩みをもつ他の参加者から「一緒にアルバイトをしないか」と誘われた。「自分で就活するのはとてもハードルが高いが誘われたらすんなりと働けることがわかり新たな発見だった」と振り返り、居場所の利点を活か

した人間関係をつくり上げた。

専門機関の立場で二人の話を聞いた三上氏は「あらためて人との出会いは大事だと感じた。とりさんにとつての『よりどころ』や大田原さんのとつての医療機関を通して出会えた信頼関係ある人との出会いがその後の生活に役立っている」「当事者の方によく伝えていくことは、3か所(人や組織)に相談できるところを用意しておけば困ることが発生したときにどこかにつながる」と述べ、助けを求める力の重要さを説明した。これはマイナスをプラスに転換する考えであり支援者、当事者、家族はひきこもりの問題探しに力を入れるのではなく、少しでも良いところを探してそこを伸ばすことに力を注ぐことを推奨した。

2回目のセミナーには定員80名を越す来場者があり貴重な当事者の声に耳を傾けた。



(写真-1) 右から鈴木祐子氏、加藤和彦氏、尾沢基氏、田中敦理事長

ひきこもり支援セミナー③(函館編)が開催されます。詳細は8ページをご覧ください

石狩市の閑静な住宅街の一角にNPO法人ジェルメ・まるしえがある。かつて小学校教員用の公宅として使用されていた三角屋根の建物に懐かしさを感じる。出迎えてくれたのは法人理事長の新田大志氏とスタッフの鷺見（すみ）光氏。ともに臨床心理士の資格をもつ専門職員だ。

フランス語で芽吹く（ジェルメ）と集う（まるしえ）という意味があり、多種多様な人たちが集まれる場所という思いが名称に込められている同法人は、主に不登校やひきこもりに対応するため2014年4月に開設。「相談室セジュール・まるしえ」と「Cafeまるくる」の二つで構成され、相談業務のほか就労準備支援、学習支援、子ども食堂を運営するなど幅広く支援活動を展開し、ひきこもりや不登校のような障害をもたない方も含めた「制度の狭間」にある人たちへの支援を実施する。

2018年度の利用者の約4割がひきこもりの状態にある人たちであるため来所相談のほか、訪問相談も受け付け、本人や家族がもつニーズに対応した柔軟な支援を実施する。また2019年度から中高年のひきこもり支援の一環として「ひきこもり家庭相談会」を9月に開催し、6名の父母が参加した。「自分と同じように悩んでいる人たちと出会えて良かった」と感想を寄せる親もあり、言



カフェでつくられた「いしかりクッキー」パッケージのハマナスの花が彩を添える

いたいことを話せる和やかさがある集りとなった。相談会は今年度内にあと2回開催する予定。同法人は新田氏、鷺見氏のほか5名の非常勤スタッフにより運営され来年度は常勤のスタッフ1名が加わる。石狩市から2014年4月より「若者支援事業」2016年4月より「学習支援事業」の業務委託を受け、石狩市がひきこもり支援政策に力を入れるなか同法人が実践本部として機能しているといえるだろう。

居場所活動の利用料金は無料だが、数百円程度の管理費がかかる。石狩市以外からの利用も可能。問い合わせ先電話番号 0133-77-5763（住所：石狩市花川北3条3丁目1番地）



理事長の新田大志氏（右）とスタッフの鷺見 光氏

札幌市議会でも高齢化するひきこもり
対策について代表質問

9月24日～25日、札幌市議会2019年度定例会本会議場において、高齢化するひきこもり問題に関する代表質問が行われた。24日に開かれた第2回定例会で質問に立った民主市民連合の林清治議員は、高齢ひきこもり当事者と親世帯が深刻な状態から改善するため複合的な課題に対応できるような事業実施体制を求めた。

町田隆敏副市長は「昨年度の実態調査からひきこもり当事者だけではなく家族に対する支援の必要性が判明したため、より幅広い分野を含め包括的な支援体制の強化を検討する」と答弁した。

25日に開かれた第3回定例会では、公明党の好井七海議員が、KHJ全国ひきこもり家族会連合会が提起する「社会復帰が就労に限られ、画一的な支援しかないため多様な生き方が認められる社会への転換を求める」ことに言及し「ひきこもりそのものが否定されず、個人のニーズに応じた支援が提供されることで、当事者や家族が助けを求めやすい社会が実現できる」と訴えた。

またひきこもりのイメージを変える取り組みとして神奈川県大和市ではひきこもり支援の窓口の名称を「こもりびと支援窓口」とした事例から札幌市でもひきこもりに対する認識を変えるなど「社会で支え合うひきこもり支援」を求めた。

町田副市長は「『ひきこもり地域支援センター』や『居場所よりどころ』の設置、市民向けのセミナーの実施により、声をあげにくい当事者家族が孤立しないよう支援につながる一歩を踏み出しやすい環境を整える」との見解を示した。

北海道新聞「読者の声」 交通機関料金値上げが当事者に打撃

2019年10月22日付北海道新聞読者の声に田中敦理事長の投稿文が掲載され、10月の消費税増税にともない値上げされた公共交通機関料金の値上げが札幌近隣在住のひきこもり当事者の行動範囲を狭め居場所に参加しにくい状態をつくりだしていることが指摘された。自助会へ冬場に自転車で参加する方や10キロの距離を往復して参加する人もあるため制度の狭間に置かれた当事者に対する社会的な配慮の必要性が述べられている。

読者の声

voice

引きこもりの人に増税打撃

NPO法人代表 田中 敦 53

(札幌市中央区)

私たちは引きこもり当事者の支援活動に取り組んでいるが、1日から消費税が10%となったことが、無職の引きこもり当事者たちに複雑な心境をもたらしていると感じている。

特に公共交通機関の料金値上げの影響である。極力外出を控える例が増え、自宅からかなり離れた当事者の集まりに節約のため数時間かけて徒歩で来る人もいる。障がい者や高齢者には、行動範囲を広げる意味もあって公共交通機関

利用時に割引などが適用されるが、引きこもりの場合、福祉制度から外れやすい課題があり、行政支援は手薄だ。

内閣府の推計では、引きこもりの人は全国で100万人を超えるという。当事者も支え手の親も高齢化する中で、引きこもり当事者の社会参加促進は、失われた自信回復にとって必要不可欠である。

せめて情報交換や語り合いができる「居場所」への参加など利用目的が明確なものだけでも、公共交通機関利用に際しての社会的配慮が検討されるよう望みたい。

(写真-1) 2019年10月22日付北海道新聞朝刊全道版

当NPO創設20周年～役員が語る③ SANGOの会の思い出

理事 吉川 修司

私が当NPOの活動に携わり19年もの月日が経過しました。最初は悩みを聞いてもらう立場で相談を受けてもらい、次第に悩みを聞く側に周ったのが縁で今日に至っています。会報は100号を越え、SANGOの会にはじまる自助会活動も10年を越えました。SANGOの会が始まって2年目の時期に参加者が0人という状況がありましたが、私一人で会場に佇んでいたことを思い出すと、現在のSANGO会や居場所「よりどころ」での活発な意見交換している当事者たちの姿をみていると嘘のような感慨を抱きます。

7年くらい前になりますが、SANGOの会で私が進行役をやったときに冒頭よく言っていたせりふが「近況報告をお願いします」でした。10人くらいの参加者の殆どが何も答えてくれず私は思わず「近況を聴いた私がバカでした」と言いました。すると横で見学していた人がクスクス笑っていたのです。後で笑っている理由を尋ねたら「吉川さんは真面目にやっているのはわかるけど顔が怒っているんですよ。本当はやりたくないのではないですか」と言われました。私はためらいつつも「そりゃあ、やりたくないですよ。面白くないですから」と苦笑しながら返答したところ、「そういった正直な気持ちを出してやればいいじゃないですか。それはそれでいいと思いますよ」と励ましにも似た回答してくれました。良い意味で考え方の転換ができた出来事でした。

私はピア・サポーターという言葉が正直言って好きではありません。ですからその技法に則ったやり方を学ぶ気持ちにもなれず当NPOでも一番やる気がない人間かもしれません。

しかし誤解しないでほしいのは、そういうスタンスでも人と関わりは持てますし、当事者個人がもつ素敵な人間性に敬意を表する気持ちはあるので、本音で語りあえる関係で個人的に付き合う方もいます。

「言いつばなし聞きばっなし」という自助会の鉄則は大事ですが、ときには場の空気を壊すことも必要ではないでしょうか。かつて「近況報告お願いします」と言っていた時期の私は予定調和的な会話で集ることに嫌気がさしていました。所詮人間同士は「分かり合えない」ものです。ピア・サポートという型にはまった人間関係ではなく多少ぶつかりはあっても一個の人間として他者と向き合った方がより人間らしい営みができると思っています。

最後に19年もの長い期間、関係を維持してくれた当事者や家族会の代表者、支援者の方々には随分引き立ていただきました。この場を借りて御礼を申し上げます。

吉川 修司 (プロフィール) 52歳。両親が既に亡く一人暮らしを続ける。大学卒業後アルバイトを十数年経験。当NPOには2000年からボランティアとして関わり2010年NPO法人になると同時に理事に就任する。趣味は将棋と一人でのこと。



◆「SANGOの会」例会のご案内

2019年11月は下記日程にて行います。初めての方も参加できます。概ね35歳前後のひきこもり当事者や経験者で、同様な仲間と話をしてみたい聞いてみたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。詳細は事務局までお問い合わせください。初めて参加される方で、少人数で会うことを希望される方は、事前に事務局までメール、電話で問い合わせのうえ初心者の例会にお越しください。

《初心者の例会》

とき：11月27日(水)午後5時30分から8時30分まで

会場：札幌市社会福祉総合センター4階 札幌市ボランティア活動センター ボランティア活動室
(札幌市中央区大通西19丁目1-1 地下鉄東西線西18丁目駅下車徒歩3分)

随時、当NPOのホームページで公開していきますのでご確認ください。http://letter-post.com/

◆居場所「よりどころ」開催のご案内(2019年11月~12月)

(当事者会) 11月18日(月)10階1010会議室 12月2日(月)※6階和室研修室「樹」
12月16日(月)10階1010会議室

(親の会) 11月25日(月)12月9日(月)※12月23日(月)10階1010会議室

開催会場：北海道立道民活動センター「かでる2.7」(札幌市中央区北2条西7丁目 道民活動センタービル) JR札幌駅南口から徒歩13分

開催時間：いずれも午後1時30分から4時まで

利用対象：ひきこもり当事者及びその家族

参加費：無料 事前申込不要 直接会場にいらしてください。

※印の日はひきこもり地域支援センター相談員の参加予定日です。

◆ひきこもり支援セミナー③『ひきこもりって何だろう。~当事者・家族・支援者をつなぐ架け橋~』(函館編)開催のご案内

第1部は当NPOの田中敦理事長の基調講演。第2部のシンポジウムでは「樹陽のたより」メンバーの田中透氏と加藤和彦氏、道南ひきこもり家族交流会「あさがお」運営委員の安藤とし子氏が登壇予定。コーディネーターは道南ひきこもり家族交流会「あさがお」事務局を担う社会福祉士・精神保健福祉士の野村俊幸氏。

とき：11月23日(土)午後1時00分から4時30分まで

会場：サンリフレ函館(函館市大森町2-14)

参加費：無料

事前申し込みが必要 詳細は主催の北海道ソーシャルワーカー協会ホームページをご覧ください <https://npohasw.wixsite.com/hasw>

◆「ひきこもりサテライト・カフェ in 小樽」開催のご案内

今後の開催スケジュール(11月以降) 11月20日(水) 12月

18日(水) 2020年1月15日(水) 2月19日(水) 3月18日(水)

とき：午後2時00分から4時00分まで 出入り自由

会場：小樽市総合福祉センター4階和室(小樽市花園2丁目12番1号)

参加対象：ひきこもり当事者及びその家族など

参加費：無料 事前申し込み不要 直接会場へいらしてください

後援：小樽市・北海道新聞社

第1回藤野地区福まち パワーアップ事業研修会

社会福祉法人札幌市南区社会福祉協議会主催「見守り活動の推進に向けたワークショップで田中敦理事長が「ひきこもり8050問題と地域の役割」について講演します。

とき：12月11日(水)
午後1時30分から3時30分まで

会場：札幌市藤野地区センター1階アリーナ(札幌市南区藤野2条7丁目2-1) 詳細は札幌市南区社会福祉協議会にお問い合わせください。電話(011)582-2415

☆編集後記☆

いつの時代も何か事が起こるたびに注目されてきましたひきこもり。今年度は例年になく講演や研修会に招かれる機会が増し多くの皆さんと交流ができました。ひきこもりへの理解が進むことを望みます。

(発行責任者 理事長 田中 敦)

無断複製はおやめください